

平成十九年の新春

あけましておめでとうございます



西栗倉村長 道上 正寿

平成十八年は、久しぶりに大雪で始まり、六月には長梅雨で稲の生育等農家の心配も有りましたが、九月以降はすばらしい好天に恵まれて、稲の作柄も平年作に終わり、自然災害、大きな事故もなく平穏なうちに一年が終わったと感じています。やはり、普通に普段着の生活、健康が一番です。

「全国町村大会」をはじめ色々な大会・総会が、毎年東京で開催されます。昨年も十二月始めに各大会に参加しました。その際の来賓であった前小泉総理の話は、すべてノーペーパーで行われ、歯切れ

がよく、明確で説得力がある等、非常に人を引きつける魅力がありました。小泉改革については、歴史的な善悪の評価は別にして、大きなリーダーシップを国民が体感しました。私自身、説明責任の伴う改革については、賛成せざるをえない気持ちになったことも事実です。

一方、安倍新総理就任挨拶の中心ですが、改革を引き継ぐ視点は明確だったものの、他は、「地域の活力なくして国の活力なし」、「美しい日本をつくる」という理念的なものが多く、具体的な方針はこれからであり、極めて静かでおとなしい話だったと感じています。

小泉前総理の聖域無き構造改革路線は、確かに色々な成果を残したと思います。ところが、規模と効率化一辺倒の改革により、「格差社会」といわれる色々な問題が新たに発生したことも事実です。

国の当面の国づくり方針は、「成長なくして財政再建なし」、「地域の活力なくして国の活力なし」を

テーマに成長力の強化・地域活性化・再チャレンジ支援・財政健全化を基本としています。

ところが、全国一〇三八の町村の現状は、極めて厳しいものがあります。期待していた地方分権の推進・三位一体改革も中途半端に終わって、分権が確立されたというより、むしろ平成の中央集権ではとも感じられます。過疎・財政・教育・限界集落等地域社会の存続すら危ぶまれます。

そこで、町村会では「健全な地方分権改革を推進すること」、「町村の財政運営に必要な一般財源の総額を確保すること」、「地方交付税の機能を堅持して新型交付税については激変を考慮すること」を国へ働きかけました。国の財政・地方の財政・道路特定財源・医療制度改革・道州制の問題等、国と地方がほんとうに対立する問題なのでしょいか？

私自身も、国際化の中で日本丸の行き先、どんな社会の創造かを中長期の視点で、説明責任を果たして欲しいと願う一人です。そうすることで、国・地方のそれぞれの役割を果たして行くことが可能になります。

日々刻々と変わる東京にはいつも驚きます。確かに皇居・明治神

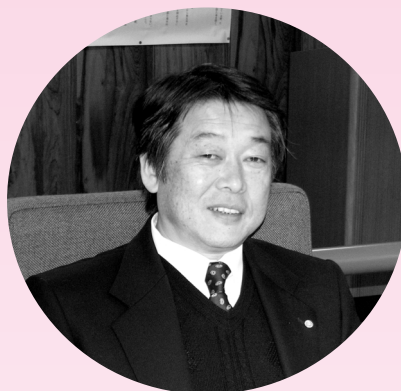
宮・靖国神社等、歴史を感じる並木道や森や施設が沢山ありますが、東京駅周辺・新宿・汐留・渋谷等変わり続ける副都心も大変に映り、そんな町で生活したり、子育てをする思いが持てません。表参道の樹齢一〇〇年のすばらしいケヤキ並木も町並みと共存していますが、中土居のケヤキ並木は邪魔者かもしれない。若杉原生林（樹齢三〇〇年）のブナの森は人の手を借りず永遠といきつづけます。走り続けることや、変わりつづけることも大切かもしれませんが、「時がゆっくり流れる」ことも人の生活には欠かせません。地域の資源はそこにあります。東京と地域社会の棲み分けと役割を明確にして、東京発の文化から脱皮しない限り地方分権は成り立ちません。いままさに村民一人一人の知恵を磨き、共に結集することが問われます。村の可能性は永遠だと信じてやみません。

最後に、村民の皆様のご健勝とご多幸をお祈りして、新年のご挨拶とさせていただきます。



謹んで

新春のお慶びを申し上げます



西栗倉村議会議長 青木 秀樹

た。経済が生活を裕福にさせ、生活がさらに経済を発展させてきたのです。

横並びの豊かさの追求が巨大な財政赤字と債務超過を生み、それを解決するための合理化と効率化が深刻な格差社会を生み出すといった悪連鎖が続いています。改革という名の下に、これまで日本という国を維持してきた仕組みや構造が大きく変わろうとしています。

昨年のことをいろいろと思い起こしながら、ふと少年時代の記憶に思いが馳せました。大晦日と元旦は1日の違いなのに風景も人の様子もがらりと変わって、本当に新しい年を迎えたんだなという実感があったものです。どの家も帰省した家族でいっぱいになり、それぞれが持ち帰った新しい都会の空気に華やきながら、大家族で迎えるゆったりとした年の始まりだったように記憶しています。

以後、年を重ねるたびに田舎の生活様式はどんどん都会に近づき、今やほとんど大差はなくなりまし

『改革』という言葉は響きの良い言葉ですが、民間業者の無い不便な地域の金融機関として、郵便事業者として日本国中に便利さと安心感を提供してきた郵便局が、地域から消されていくようにしている今、それでも私たちはこのことを改革と呼ぶなければならないのでしょうか。これについては先の自民党の復党問題でも明かな様に、世論もマスコミも政治家も中身に光を当てて検証しようとはしていません。郵政民営化が改革(善)、その中身を疑問視する立場は反改革(悪)との位置づけでしか物事が論ぜら

れていないのが気がかりです。

人口減が止まらない状況です。

出生率は一時のように落ち込み続ける傾向はありませんが、いったん減ってしまった人口をとり戻すのは並大抵のことではありません。それでも、もともとわが村とはゆかりのない、新しい住民の方も少しづつですが増加傾向にあります。この地で新しい人生のスタートを迎えられる方々に心から祝福をおくりたい心境です。安心、安全に加えて《安住》という施策にも重点を置く必要があります。

食料自給の問題、エネルギー問題、農地や山林の活性化、環境と教育、日本が抱える問題の多くは、わが村にとっても当てはまります。それをどう解決に導くかは、私たちの知恵と行動力にかかっているはず。もう一度、しっかりとわが村を見直してみなければなりません。あわてず、騒がず冷静な目で、この村と村民を見つめ、この村の将来とその役割について考え直す一年にしたいものです。

さて、平成十六年十月以降、岡山県内の市町村数は十市六十八町村であったものが今月中には十五市十町二村となり、これで県内の市町村合併も一応の落ちつきを見た格好となります。これまで、英

田郡といえは六カ町村で構成していたものがわが村一村となり、少し寂しい気もしないではありません。しかし、本来の『自治』を考えると、これはこれで分かりやすい選択であったとも考えられます。つまり、五三〇戸あまり一、六五〇人ほどの人口をもって、『日本の中の西栗倉、岡山の中の西栗倉村として「小さくても安心、安全で暮らしやすい村」を目指してお互いに協力してやって行きましょう』という意思を再確認できたわけですから、合併問題もあながち迷惑なことばかりではなかったのかもしれない。事務運営については大きく構えることが大事ですが、住民の意思を反映したり決定する時には小さくまとめることが有効だと思います。その有意性をこれからさらに追求し、議会一同、皆さんと共にかけがえのない素晴らしい西栗倉村を目指してまい進する所存でありますので、本年もよろしくお願い致します。

